

晚秋行

装幀  
泉沢光雄

写真  
小嶋禎一／Franz Steiner／susan.k．／rusm／Masako Ishida

店の電話が鳴ったのは、鳥肉、里芋と一緒に煮る大根の皮を<sup>えんどう</sup>円堂が剥いているときだった。大根の皮は千切りにしてひと塩し柚子の皮と合わせると、雑炊とともにだす漬け物のかわりになる。これを気に入った客がいて、皿いっぱいだしてくれといわれたことがある。元は大根の皮なので、一日に多くは作らない。断わると、作り方を教えてくれと食い下がられた。確か、自分も料理をするという推理小説家だった。

「親方、お電話です」

受話器を手にしたケンジがいった。

「作家の中村<sup>なかむら</sup>さんて方です」

「おい、火」

円堂はいった。ケンジはパンキンシードの塩煎りを作っている最中だった。乾かしたカボチャの種の芯を宮古島の雪塩で煎るのだ。ワインやウイスキーに合うのだが、煎りすぎると<sup>は</sup>爆ぜて食感が悪くなる。

「あつ」

ケンジはフライパンの火を止めた。

作家のことを考えていたら、別の作家から電話がかかってきた。包丁をおき手をぬぐって、円堂は受話器を耳にあてた。

「なんでいちいち作家と断わるんだ。ただの中村でいいだろうが」

「だって中村っていっぱいいるだろうが。だからって中村充悟じゅうごとフルネームを名乗るのも恥ずかしい」

「作家と自ら名乗るほうが恥ずかしくないか」

「いいんだよ。お前のとこの若い衆なのだから」

三十年を超えるつきあいだ。お互い、そっけないやりとりになる。

「今、仕込み中だ」

「わかっている。携帯に電話してもでないから店にかけたんだ」

いわれて円堂は、店のカウンターにおいていた携帯に目をやった。仕込みが終わるまではいつもマナーモードにしている。

「急ぐ理由があるのか」

「あるからかけてるんだ。赤のスパイダーを見た奴がいる」

「どこで？」

「うちの近所だ」

中村は十年前、愛犬とともに栃木県に引っこした。那須なすの外れにある別荘地の古い一戸建てを

格安で手に入れたのだ。当時は小説家としてデビューしたばかりで、東京で暮らしていくのがきつかったようだ。今は時代小説作家としてそこそこ売れているらしい。

「二見は那須に別荘をもっていたろう」

中村にいわれ、思いだした。那須の他にも熱川あながわと軽井沢かろいざわにももっていて、沖縄にも建てようとしていた。金の使い途に困っていたのだ。

「本当にスパイダーなのか」

円堂は訊ねた。

「まちがいない。四つ葉社の担当がかわってな。新しい担当が挨拶にきたんだ。そいつは前に車雑誌の編集部において、クラシックカーの連載を担当してたからスパイダーが日本に何台あったのかも知っていた」

「乗っている人間は見たか」

「サングラスをかけた女だったそうだ」

「ひとりか」

「ひとりだったらしい」

円堂は宙を見つめた。

二見ももっていたのは、一九六〇年に発売されたフェラーリ250GTカリフォルニア・スパイダーというオープンカーだ。二見の話ではフェラーリ250GTカリフォルニア・スパイダーは一九五七年から六三年にかけて一〇四台が作られた。話を聞いた当時でもクラシックカーで、二見はそれを十億以上の金を払って手に入れた筈だ。

二見がもっていた車は、その250GTだけではない。ふだんの移動は運転手つきのロールスロイスで、軽井沢の別荘にはランボルギーニをおいていた。ランボルギーニは音がうるさいからと、あまり乗らなかつた。

だが一九九一年九月、スパイダーを運転している姿を見られたのを最後に、行方がわからなくなつた。以来、消息は不明だ。

そして君香も姿を消した。

君香のことを考えると、いまだに怒りと後悔がこみあげる。三十年もたつていてというのに、まだ踏んざりがついていない自分が腹立たしい。

真剣に惚れていたからだけではない。これほどひどい裏切りをうけたこともなかつた。

いや、裏切られたのは自分だけではないかもしれない。二見もまた、裏切られたのではなかつたか。

「例の女じゃないのか」

中村の声が円堂を現実にはひき戻した。君香という源氏名を中村も知っている筈だ。君香が働く六本木のクラブにさんざんつきあわせた。だが中村は、「例の女」としかいわない。

当時から君香のことを嫌っていた。

「ああ。だが本人の筈はない。生きていたらもう六十近い」

「そんなのわからないだろう」

「いや、俺にはわかる。あいつは生きてない。二見も、生きていない」

「じゃあスパイダーをどう説明する。あんな珍しい車が何台もある筈ない」

円堂は黙った。確かにスパイダーが、そう何台も残っているとは思えない。しかも色は赤だ。二見は日本にはこれ一台だけだと自慢していた。

「俺たちは貸しがある」

中村がいった。

「貸し——」

「もし二見が生きていて、スパイダーをもっているなら、その貸しを返してもらってもバチは当たらない」

「二見に貸しがある奴なら、いくらでもいるぞ」

会長の二見が失踪したとき「二見興産」が抱える負債は千億を超えていた筈だ。債権者は金融機関だけではなかった。裏の筋の金も相当額、「二見興産」には流れこんでいた。

暴力団や政治団体も二見には稼がせてもらっていた。「地上げの神様」と、二見を呼んだ銀行マンもいた。

「だが俺たちののは労働債権だ」

「そんなものはとつくに時効さ。何年たつたと思ってる」

円堂と中村は「二見興産 調査部」の名刺を与えられていたが、正社員ではなかった。

中村はルポライター、円堂は示談交渉人が本業だった。本業といっても職業として名乗れるようなものではなく、法ぎりぎりのところで稼ぐ灰色稼業だ。

それは二見に雇われていたときもかわらない。地主の情報を探り、弱みをつかんで「二見興産」に土地を売らせるよう仕向けるのが、二人の仕事だった。

地上げにはやくざも多く使われていた。バブルの最中だ。地主や借地人を立ち退かせるために家族をおど威したり放火するような奴もいた。

二見はそういう連中を「外道げどう」と呼んでさげす蔑んだ。

「札ビラで動かないなら、気持ちに訴えろ」

とよくいわれたものだ。高齢の両親、留学したがっている子供、不始末を起こした道楽息子、さらには入手が難しいコレクターズアイテム、地主や借地人がいうことを聞かざるを得えなくなる理由を探し、説得するのが中村と円堂の仕事だった。

そうして立ち退きに合意させ、転売して得た利益の二パーセントが二人の報酬になった。

一億なら二百万、十億なら二千万だ。

二人が二見から得た報酬はいくらだったろう。合わせて一億は下らなかつた筈だ。入るそばから、円堂は使つていった。「地上げの神様」についている限り、永遠に稼げると信じていた。

バブルが弾け、「二見興産」に債権者が押し寄せたとき、二人に支払われるべき報酬は八千万ほど滞つていた。

「二見興産」だけではない。地上げ、土地転がしが限界にきていることは少し前から匂つていた。が、誰もが自分だけは売り抜けられると、根拠なく信じていた。

土地転がしに携わる誰もが、導火線に火がついた爆弾でキャッチボールをしていたのだ。

が、あるとき、それらの爆弾が一斉に爆発した。まだ導火線は残つていた筈なのに、次の奴に渡す前に全員の手の中で爆発した。

「飛ぶ」と、あの頃はいった。



奴は飛んだ、あの社も飛んだ。そんな言葉をうんざりするほど聞いた。弾け飛んだ、という意味だ。何もかもが消え、身ぐるみ一切を奪われる。債権者から守るため家族と別れ、土地も家も車も絵もゴルフ会員権も、すべてを失くす。

「二見興産」も飛び、中村と円堂も飛んだ。

中村には贅沢好きの女房がいた。ブランド品が大好きで、車はメルセデス一辺倒だった。

中村が職を失ったことを聞くと、その日のうちに、買わせた洗いざらいをメルセデスに積んで、でていった。

円堂は独身で、金の使い途は女と食いものだった。六本木や銀座のクラブの女とうまいものを食べ歩き、体を重ねた。

中村よりははるかにいい思いをした、といえるだろう。金を自分の楽しみに使ったのだ。

「じき三十年。確かに時効だ。お前はいいよな。好きなことに使って、挙句に居酒屋の親父におさまった。食べ歩きも無駄じゃなかったのだからな。だが俺はどうだ？ 映子がでていって何も残っちゃいない」

映子というのが中村を捨てた女房の名だ。確か元はさほど売れていないモデルだった。

「だが今は立派な作家先生だ」

「あのな、作家なんてのは浮き草稼業だ。働いたぶんしか金にならない肉体労働者なんだよ。売れなくなれば注文はこない。注文がきても書けなくなったらそこで終わりだ」

「才能があるから作家になったのじゃないのか」

「才能だと。才能は壺の中にあつて、掻きだしているうちに、いつ底をつかわからないんだよ。

「今日か、明日か、と怯えてる」

「だからどうしたいっていうんだ」

「探そうぜ、スパイダーの持ち主を。もしそれが例の女で、二見も生きてるとなれば、俺らには、いくらか貰う権利がある」

「仮りに二人とも生きていたとしよう。お前と同じように小さな家でひっそりと暮らしてるとする。金なんかとれないぞ」

「スパイダーがあるじゃないか。走れるくらいの状態なんだ。売れば十億や二十億にはなる」

確かにそうかもしれない。だが円堂は気がすまない。二見を探するのは君香を探すのと同じだ。いまだに痛みが残る。三十年前の古傷をつつきたくない。

「親方」

ケンジに呼ばれ、我にかえった。

「その話はまたにしよう。仕込みに戻らなけりゃならない」

円堂はいつて電話を切った。

## 2

居酒屋「いろいろ」は、中目黒なかくろの駅に近い雑居ビルの地下にある。六時開店、十時半ラストオーダー、十一時半閉店だが、十一時過ぎまで客が残ることはめつたにない。

店を始めた九年前に比べても、大酒を飲んだり長つ尻の客は減っている。

一部の人間を除けば、夜遊びに関して皆おとなしくなっている、というのが円堂の印象だ。

この二年は手伝いのケンジの成長もあって商売は順調だった。お運びのユウミも客に人気がある。下積みの舞台女優だが、すれたところがなく、黒髪でピアスも入れていない。

ケンジは三十二、ユウミが二十二だ。円堂の目には、互いを憎からず思っているように映る。が、男女のことだ。もつれてどちらかが辞める、というような流れにはなつてほしくない。といって、つきあうなというのも、いくら店主とはいえ横暴だろう。

ケンジは前に勤めていた鮎店でのいじめに耐えかねて「いろいろ」の求人に応じてきた。

チェーンの大鮎店で、話を聞くと、板場は厨房というより工場のような感じだ。先輩料理人によるいじめが横行していて、口の重いケンジは標的にされたらしい。

暖簾のれんをおろしたあと板場の片づけは円堂の、カウンターと小あがりの掃除はケンジとユウミの仕事だ。

解放感からじゃれあうケンジとユウミに、微笑ましいものを感じながら、

「お先に」

といって円堂は店をでた。店の鍵はケンジにも、もたせてある。最近はこちらよくひとりですり入れにもいかせていた。食材への目を養わせるためだ。駄目なものを買ってきたら、なぜ駄目なのかを教える。

昔の料理屋では、若い板前が悪い品を仕入れると、花はな板いたと呼ばれる板長が理由もいわずゴミ箱に叩きこんだという。

自分は本職の料理人ではない。ただの好きが昂こぶじて包丁たばたけを握るようになった素人だ。そんな人

間が、目下の者につらく当たるのは論外だと思っている。

厳しい修業を経て、技術や目を身につけたわけではないのだ。所詮、真似ごとにすぎない。本来なら、年を食っていても板場で一から修業すべきだったのを飛ばして、店を始めた。

初めの何年かはほぞをかむことも多かった。

なりがよくいかにも食通然とした客がくると緊張し、ひと口だけで箸をおかれて愕然としたこともある。

不味いなら不味い、といってもらえるほうがよかった。何がどう不味いかを訊ね、今度に役立てられる。

「お口に合わないようでしたら、お勘定はけっこうです」

と頭を下げると、

「私からはとらないが、他の客からはとるのかね」

蔑んだように返されたこともあった。

万人が旨い、と感じるものなどない。塩加減、脂のりかた、火の入り具合、肉、魚、野菜すべてに人の好みがある。名店といわれる店は、味のパターンを守り、変えない。それを好まない客であつても、不味いとは決して思わせない。

そこに到達するのは不可能だと円堂は思っている。修業を積んだ料理人でも、ごくひと握りしか、たどりつくことはできない。

プロの料理とは再現性なのだ。

人間なのだから、日々の体調は変化する。

暑い、寒い、乾いている、湿気がある、どんなときでもプロの料理人は同じ味をだす。だが実はそれは同じ味ではない。

汗をかく夏は塩気を少し強くし、外が冷える冬は熱いものを熱いうちにだすことを心がける。その境地に達する料理人には母性が必要だ。

上手に作るのではなく、おいしく作ろうという気持は、子供に対する母親の気持に近い。

女房も子供もいない円堂が、客に対し母親のような気持で料理を作っているといたら、常連客ですら不気味に感じるにちがいがなかった。

足りない技術は気持でカバーする他ないのだ。

店をでた円堂は、徒歩で十五分ほどの自宅マンションに向け歩きだした。

が、中目黒駅の高架を見て気持がかわった。地下鉄日比谷線の北千住行き電車に乗りこむ。銀座で降り、七丁目の雑居ビルにある、委津子いっこの店に向かった。

委津子とはバブルまっ盛りの一九八八年に銀座のクラブで知り合った。ずば抜けた美人ではないが頭が切れ、腹がすわっていた。有名な大箱おほひらのナンバーワンだった。

当時の銀座でナンバーワンになるホステスは、抜群に美しいか頭が切れるかのどちらかだった。近くで見ているだけで男を幸せな気持にする美人がこの世にいることを、円堂はそのとき知った。

頭の中身など空っぽでもいい。ただ隣りにすわり笑いかけられるだけで、いくら使っても惜しくないと思わせられるような美女だ。

さもなければ談論風発だんろんふうはつ、どんな話題にもついてきて、出過ぎた発言は決してせず、客が店に求

めるものをいわれる前に提供する。接待をするなら、この店のあの女に任せるに限ると客に信頼される。

委津子はまさにそういうホステスだった。大手銀行、ノンバンクを問わず金融機関の客から全幅の信頼を寄せられていた。

パブルが弾けたとき、相当の売りかけをくらった筈だが、それでも生きのびた。

銀座のホステスは、売れっ子になると「売り上げ」といって、客の払いに責任を負うようになる。ひと晩に何十万と使う客はその場で支払いなどしない。売りかけというツケにして、月末などに精算する。

もしその客がパンクすれば、店への支払い義務はホステスに生じる。「売り上げ」になれば給料は客の使う金に連動して上がる。稼ぐホステスは月に一千万を超える。その一方で客へのつけ届け、若い「ヘルプ」のホステスへの気配りで、でていく金も多い。さらに立場に応じて、着物やドレスも安物は着られない。稼いでも、でていく金は多く、太客が飛んだとたん、何千万という売りかけを背負わされ、クラブからソープランドへと職場をかかわらざるをえなくなることがある。

もちろん消える女もいる。店への借金を払わず、ほとぼりがおさまった頃、他の街でホステスを始める。

が、水商売の世界は狭い。銀座をば、つくれた女が、すすきの薄野やにしき錦、しんち新地、なかす中洲などで働きたせば、必ず見つかり古巣へ知らせがいく。

一方でソープランドで稼いで売りかけを完済した女が銀座に戻ってくることもある。ソープに

いたとは決して口にしない。

銀座でいくら口説いても、のにできなかつた女がソープにいるとわかれば、大喜びでいく客もいるだろうが、ソープで働いていることは決して教えない。

なぜなら、ソープランドで払う金額を、銀座のクラブではすわつただけでとるのだ。抱いた女に、手も握らないでそんな金を払う男はいない。だからソープで見たことがあるという客がいても、他人の空似で押し通す。ソープランドと銀座の高級クラブでは客種が異なるので、思いのほかばれない。

大箱のナンバーワンを経て、委津子は雇われのママを十年ほどやり、やがて自分の店をもつた。それはおおかたの予想を裏切りクラブではなく、こぢんまりとしたスナックだった。バーテンがひとりに手伝いの女の子が二、三人という小箱だ。料金もクラブに比べれば半分以下で、売りは料理とカラオケだった。

料理は、バーテンが洋食を、委津子が和食を作る。求められれば、味噌汁と飯をつけ定食にもする。

十二時には女の子を帰すが、クラブとちがって朝まで営業する。

委津子と知り合つて三十年以上になる。知り合つたときすでに委津子はナンバーワンだった。

男女の關係にはならなかつたが、太客でもない円堂を決してないがしろにすることはなかつた。それが委津子が多く客に信頼された理由のひとつだ。

バブル崩壊とともに多くの客を失つても生きのび、水商売をつづけ、今は「お母さん」と女の子たちに呼ばれている。店の名も「マザー」だ。

クラブの勘定など払える身分ではなくなった円堂が今も通う、唯一の銀座の酒場だ。

「いらっしゃい」

「マザー」の扉を押すと割烹着を着けた委津子がカウンターの中で迎えた。手伝いのユキという大学生の娘が帰り仕度をしている。

「お先です。あ、円堂さん——。円堂さんがいるのなら残業しちゃおうかな」

「タクシー代はでないぞ」

円堂はわざといった。

「だって円堂さん、中目黒でしょ。あたし恵比寿だから落っことしてもらえるもん」

店に他の客はいなかった。

「子供は帰んなさい」

「あつ、お母さんといふことするんだ」

ユキが円堂をにらむ。

「そりやお母さんとお父さんだもの。たまにはそういうこともしないとね」

委津子がたつと笑った。

「やだつ。親のエッチの話は聞きたくない。帰ろうつと」

ユキはいつて店をでていった。

「どっちにする？」

吉四六きしよくとオールドパーのボトルをカウンターにおき、委津子は訊ねた。焼酎とウイスキーの二種を、円堂はキープしている。



わずかに息を吸い、円堂はオールドパールのボトルをさした。

「飲みかたは？」

「ハーフロック」

委津子は頷き、丸氷をいれたロックグラスに、ウイスキーと水を同量注いだ。

ホステス時代に比べればひと回りふくよかになり、そのぶんやさしげになった。現役時代の委津子は店のすみずみにまで目を配り、黒服に厳しく接していた。声を荒らげて怒ることはしなかったが、対応の悪い黒服には厳しく注意した。

委津子ママのおかげで一人前になったという、元ボーイ、今はクラブの社長が何人も「マザー」の客にいる。

「あたしも飲んでいい？」

「もちろん」

小さなグラスに手早く水割りを作った委津子と円堂は乾杯した。

「何かあった？」

以前はシャンペンを日に三本も四本も空けた委津子だが、今は口を湿らすていどしか酒を飲まない。

「二見の車を見たって奴がいる」

わずかに間をおき、委津子が訊ねた。

「二見会長も見たの？」

委津子に初めて会った店は、二見に連れていかれたクラブだった。君香もそうだ。円堂が足を

運んでいた銀座や六本木のクラブは、どこも最初は二見に連れていかれた。

二見は月曜から金曜まで、毎日飲んでた。それも十二時までには銀座、それ以降は六本木、そして両方のクラブのホステスを連れてアフターにも行ってた。

アフターとは、店がはねたあとのホステスを連れて遊びに行くことだ。食事や歌、場合によってはそのままベッドになだれこむこともある。

湯水のように金を使い、しかしそれをひけらかすことをしなかった二見はもてた。抱いた女には、それなりに礼を払っていた。アフターが終わり近くなると、

「今日はあだし」

というホステスが、二見の隣りを奪いあうこともあった。拳句に、

「今日は二人いっぺんに面倒をみて」

といわれ、

「そんな体力あるかよ」

と苦笑していた。

当時五十の半ばを過ぎていたが、毎晩飲み、二、三日に一度はホステスを「お持ち帰り」していた。離婚し独身だったとはいえ、驚異的な体力だった。

だからこそ円堂は、二見には特定の女はいない、と思っていた。

気にいっていた女はいたろう。月に一、二度は同じ女を抱くこともあったとは思う。

が、君香が二見にとつて特別な女だとは、円堂はまるで考えていなかった。君香本人も、

「二見会長とは何もないよ。だってあたし、好みのタイプじゃないもん」

といていた。

その通りで、二見はバストの大きい、グラマラスな女が好きだった。君香は細身で、胸は決して大きくなかったのだ。

「いや、女が運転していたそうだ」

円堂は委津子に答えた。

「本当に会長の車だった？」

「百台くらいしか作られなかった、フェラーリのクラシックカーだ。たとえレプリカでもめつたにない。色も同じ赤だったそうだ。見たのはクラシックカーに詳しい人間らしいんで、まちがいないだろう」

委津子は円堂を見つめた。

「会長は生きてるってこと？」

「わからない。一番気にいった車に乗って行方がわからなくなった。どこか山奥で死んだと思っていた」

「ひとりで？」

「いや。たぶん君香と」

「君香さん。円堂さんがつきあっていた、六本木の女ね」

「つきあっていた、か」

円堂はつぶやき、酒を口に含んだ。つきあっていると思っていたのは自分だけだ。

君香が本当に惚れていたのは二見で、自分は遊ばれていたに過ぎない。

「思いたすと今でも自分に腹が立つ」

委津子に目を向け、

「三十年もたっているのにな」といった。

「つまり今も惚れているってことね。そうでなければ腹を立てたりしない」

円堂は息を吐いた。

「未練がましい男だよ。自分じゃなけりゃ、ひっぱたきたいね」

「かわりにひっぱたいてあげようか」

委津子は微笑んだ。

「やめてくれ。本気で殴られそうだし」

円堂は首をふった。

「そうよ。お母さんになつたってヤキモチは焼く」

「おいおい、何もなかったらう、俺たちは」

「だから焼けるのよ」

委津子はいった。

「よしてくれ。お母さんに惚れられているなんてわかったら、何人に目の敵にされるか」

本気で委津子に結婚を申しこんだ客を三人は知っていた。ひとりは大相撲の横綱、ひとりは三代つづく大阪の大問屋の社長、もうひとりは妻に先立たれた国会議員だ。後に閣僚になった。

「皆んなにあって、とっちめてもらおうかしら。ずっと円堂さんに片想いしていたのに相手にし

てもらえなかったって」

「話を作るなよ」

委津子は笑い声をたてた。

「皆んな、あたしにはすごいパパがいると思っていたのよ」

「わかるよ。でも、始めたのがこの店で、『なんだ売れない絵描きか役者でも養ってたのか』っていわれたろう」

円堂がいうと委津子にはらんだ。

「ずっと男がいなかったとはいわないけれど、面倒をみてくれた人もみた人もいない」

「崎田さんだったりして」

「お呼びですか」

キッチンからバーテンの崎田が顔をのぞかせた。じき七十三になる。委津子がママをつとめていた大箱で働いていた。退職して妻と洋食屋を田舎で始めようとした矢先に、その妻が癌がんになり、治療費に困っていたのを委津子が助けた。やがて妻は亡くなったが、崎田は田舎に帰らず「マザ―」で働いている。

「やめて。崎田さんはマジメなんだから、そんな話をしたら切腹しかねない」

委津子がいった。すると、

「ここだけの話ですが」

と崎田が声を潜め、円堂と委津子は真顔になって見つめた。

「ママが私の娘だって噂があるんです」

「いやいや、年が合わないだろう。崎田さんがいくつの子供だよ」

「失礼ね。あたしはまだ五十代よ」

「だとしても年が近過ぎる」

「二人とも年をごまかしているんです。本当は私が八十で、ママが四十代なんです」

崎田がとぼけた顔でいったので、円堂と委津子は吹きだした。

「意味がわかんないよ。崎田さんが年を若くいって、ママが多くいってること？」

「そうなんです。親子だというのがバレないように」

崎田は細い目を大きくみひらいて頷いた。真剣な表情だ。

「本当のところ、私もこんなに働き者の娘がいたらありがたかったです」

崎田には息子が二人いるらしいが、どちらも警察の厄介になりがちだと聞いていた。

「崎田さんがお父さんだったら、もつとお料理を習えた。今だつて教えてくれないのよ」

委津子がいうと、崎田は鼻の穴をふくらませた。

「当然ですよ。ママが料理を覚えたら、私はお払い箱になっちゃいます。こんな年寄りを雇って

くれる店はもうありませんからね」

「そんなことないわよ。一昨日も『ルアーナ』の社長が崎田さんを欲しいって口説いてたじゃない」

「い」

「えっ本当ですか。いっちゃおうかな。でもいじめられるだろうな。爺い、何しにきたって」

「崎田さんは『マザー』にいなけりゃ駄目だよ。俺もいろいろ習いたいのだから」

円堂はいった。崎田は、洋食のソースを作るコツを、いくつか円堂に教えてくれたことがあつ

た。

「じゃあさ、円堂さんだけ別チャージね。崎田さんから料理を習ったら、指名料ってことで」

「それは私に入るんですか？」

崎田が訊ね、

「折半」

委津子は答えた。

「こんなしがない居酒屋のオヤジからぼったくるのかよ」

「若いときにとらなかつたから、今、とるわ」

涼しい顔で委津子が頷いた。

「それはしかたないですね」

崎田がいい、

「何だよ。崎田さん、どっちの味方だよ」

円堂は口を尖らせ大笑いになった。

笑いやむと、委津子がいった。

「乗ってたのは君香さんかしら」

「わからない。生きているとしても君香だっただけいい年だ。それにどうやって生きのびたのか。心中したのだとばかり思ってた」

円堂は首をふった。崎田は無言でキッチンにひっこんだ。

「無理心中？」

「二見はそういうタイプじゃなかった。死ぬなら自分ひとりで死ぬ。心中したのなら、君香のほうからもちかけたのだろう」

「なぜ？」

円堂は酒を呷あそばった。自分と二見との三角関係に倦うんでいたからではなかったか。

円堂は本気で惚おぼれていた。結婚すら考えていた。それをいついだそうか迷っているうちにバブルが弾けた。

君香は君香で、本当は二見の愛人だったのに、遊びでつきあつた円堂に真剣になられ疲れていたのでないか。

二見との関係を露あれども円堂に気づかせないために苦勞し、何もかもが嫌になったのかもしれない。

「疲れてたのだろう」

ぼつりといった。委津子は首を傾げた。

「あのとき、たいていのホステスは疲れていたし、焦つてもいた。とんでもない売りかけをしようされて自殺した子もいっぱいいた。結局、店ごと潰れちゃうから関係なかったのにね」

売りかけが回収できれば店は安泰だが、とてもそんなわけにはいかない、クラブのオーナーたちもすぐ知ることになった。

電話一本で土地を転がし、

「おい、また一億儲かっちゃったよ」

笑つて、アイスバケットにドンペリを空けさせ、ホステスと回し飲みした客が一夜明けると文



無し以下、一生かかってでも返せない借金に溺れていた。

「今考えると信じられないよね。うちに帰って着物脱ぐでしょ。ぼたぼた折った万札が落ちてくるの。チップでつっこまれたお金。日給よりそっちのほうが多かったもの。若い子に話すと、嘘でしょっていわれる」

「皆が欲ボケしていたんだ。土地は永久に値上がりする。日本列島の土地の値段で、アメリカがいくつも買えるなんて馬鹿なことをいつてた」

円堂はつぶやいた。

「でも君香さんが死んだとは思えないな。もし死ぬのだったら、二見会長とじゃなくあなたと死んだわよ」

「俺は自殺しない。自殺を考えなきゃならないほど大物じゃなかった」

「だったら二見会長だけ死なせて、あなたと生きる道もあった」

「それはひどすぎないか」

「そう？ 女は皆んなしたたかよ」

そうしてくれたら自分はつらい日々を送らずにすんだ。だがあくまでも真実を知らなければの話だ。

二見とのふたまたまを知ったら、君香を許すことはできなかつたらう。心中ではなく、殺す道を選んだかもしれない。

「あいつが二見といっしょに消えて、初めて俺は二人がつきあつてたことを知つたんだ。二見との関係をこれっぽっちも疑つたことはなかった」

「二見会長に恨みはないの？」

「まったくないわけじゃない。だがそれは君香のことを俺に黙っていた点だけだ。あれだけの人だ。君香が惚れたのも当然だ」

「今でも尊敬しているの？」

「尊敬か……。かつこいい人だったと思う。理由は、わかるだろう」

委津子は頷いた。

「わかるわよ。稼ぎかたも使いかたも、下品なところが少なかった。お金って、なくてもありすぎても、人の本性をむきだしにする。いくらでもお金があると、世の中のことはいいたい思い通りになる。その結果、信じられないくらい卑しいことをするの」

「俺よりお前さんのほうが詳しいだろうな」

「ホステスは金で思い通りになる。ホステスは人間じゃない。本気でそう考えている人がたくさんいた。いい学校をでていい企業に入って、たっぷり稼いでいる人に限って、そうだった」

「そういう奴らも、今はちがう。破産して消えてなくなったのは別だが、生きのびた連中は皆、反省してるさ」

「反省なんかしてないわよ。自分は悪くない、時代が悪かったんだっていうばかりで」

「そういう客はくるか」

「くるわよ、たまに。クラブ時代、さんざん使ってやったのだから、ただで一杯飲ませろっていの」

「飲ませるのか」

「本当に一杯だけね。二杯めは正規のお値段をいただく」

円堂は首をふった。たいしたものだ。もし委津子とつきあっていたら自分はどうかだったろう。

もう少しまともな生活を送っていたかもしれない。だが長くはつづかなかった。自分が捨てられて終わり、こうして向かいあって飲む関係にはなれなかった。

「何を笑ってるの」

委津子が訊ねた。

「笑った？ 俺が？」

「そうよ。今黙って笑った。何かおもしろいことを考えていたでしょう」

委津子が円堂の目をのぞきこんだ。円堂は笑いだした。

「いえないね」

「何よ、嫌な人ね。わかった。君香さんのことを思いだしていたんでしょ」

「まったくちがう」

「嘘よ」

「本当だ」

「じゃ、いいなさいよ」

円堂は首をふった。いうわけにはいかない。この場がぎくしゃくしてしまう。「マザー」で軽口を叩きながら飲む時間を失いたくなかった。

「感じ悪い」

いって、委津子は円堂のグラスに新しい酒を注いだ。そしていった。

「捜しにいけばいいじゃない」

「何を？」

「決まってる。二見会長の車。君香さんに会えるかもしれないわよ」

円堂は委津子を見つめた。

「会いたいのでしょ」

委津子はいった。

「別に今さら——」

いいかけたのを委津子はさえぎった。

「よりを戻したいとか、そういうのじゃないことはわかってる。でも会って、いいたいこととか訊きたいことがあるのじゃない？」

さしだされたグラスを円堂は口に運んだ。

「ほら、吸いこみがいい。凶星だ」

「中村に誘われた。いっしょに捜そうって」

「中村さんて、中村先生？」

中村が小説家になっていることを教えると、いつからか先生と委津子は呼ぶようになった。本を読むのが好きで、物書きを無条件で尊敬しているのだ。

「そうだ。二見に貸しが残っている、というんだ。それを回収しよう、と。生きている筈ないし、たとえ生きていてもできるわけないのに」

「お金じゃないわよ。中村先生の本、売れているもの」

委津子が断言した。

「じゃあ何だ？」

「決着をつけたいのよ」

「決着？」

「あなたとは理由がちがうだろうけれど、中村先生も自分の昔に決着をつけていない。奥さんに捨てられたのでしょうか？」

「金の切れ目だな。別に未練はない、と思うぞ」

「じゃあ、あなたは未練があるの？ 君香さんに」

「それは、ない」

「だけど思いだしては楽しんでる」

「楽しんでる？ 俺がか」

「そうよ。男って本当に馬鹿だなんて思うのが、昔の女の思い出にひたるところ。とつくにあんたのことなんか忘れて楽しくやってるっていうのに、あいつは今でも俺に惚れてるなんて、感傷的になる。そういうのでお酒を飲むのが大好きなのよ」

「ひどいことをいうな」

「女は昔の男のことなんてこれっぽっちも思いださない。年をとったら、男よりいいものがたくさんある。おいしいものを食べたり旅行にいたり、年なりのお洒落をしたり。男はさ、いつまでも甘い思い出にひたってる。ま、安あがりといえど安あがりよね」

「そんなことはないだろう。思い出酒を飲ませて金をとるのだから」

円堂がいうと、委津子は舌をだした。

「だってちよろいんだもの。『今でもあの人のこと好きなんでしょ』って水を向けるだけで、勝手に喋り始めてボトルが空いちやう。あんなことやこんなことをしてくれた、いい女だったって。ひとりで気持よく語りだすからね。こっちはハイハイって頷くだけで儲かっちゃやう。あげくの果てに『あいつも俺にまだ惚れてるよ』って。そんなわけないじゃない。あんなことやこんなことは、次の男にも今の男にもしてるし、あんなことなんてこれっぽっちも覚えていませんからって」

「そういえよ」

「駄目よ、お店が潰れちやう。潰れたら『いろいろ』の女将おかみさんにしてくれる？」

「そんな給料払えるわけないだろう」

委津子にはらんだ。

「意味がちがう。あたしはね、円堂さんの思い出酒にだけは、つきあうのが嫌なの。だから決着をつけてほしい」

「どう決着がつくんだ？」

「そんなのわからない。二見会長も君香さんも、生きているかも死んでいるかもわからない。でもその車を捜せば、どうなったのかはわかるのじゃない？ それだけでもひとつ、決着をつけられる」

「君香が生きていて、よりを戻すって俺がいいですかもしれないぞ」

「そのときはそのときよ。円堂さんがそうしたいならすばいい」

「強いな、お母さんは」

円堂は首をふった。

「あなたがずっと引きずっているのを見たくないだけ。二見会長が消え、君香さんがいなくなつて、本当は何があつたのか知りたくてしかたなくせに、痩せ我慢しているのが丸わかりなの」

円堂は首を傾げた。

「俺、そんなに思い出話したかな」

「してないわよ。思い出になんかなつてないのだから」

思わず委津子を見つめた。

「今の円堂さんは不幸じゃない。それは確か。お店がうまくいって、あたしもよかつたって思っている。でも、明日もし死んじゃうとしたら、気にならない？ 思い残すことはないといえる？」

「思い残すことがない奴なんていないだろう」

「理屈をいわないで。あたしはあなたの話をしているの。君香さんに何があつたのか、知りたいのでしょう」

「わかった、わかった。勘弁してくれよ」

「ここに来たのは、自分の気持を確かめたいから。昔話の相手ができる人はあたししかない」  
委津子の声は厳しかった。

「参ったな」

円堂は息を吐いた。

「煙草、あるか」

「駄目。何年も前に止めたでしょう」

「一本だけだ。気持の整理をつけたい」

委津子がかがみ、カウスターの下から封の切られたメンソール煙草の袋をとりだした。

「はい。お客さんの忘れもの。一本だけよ」

委津子は煙草を吸わない。あの時代、煙草を吸わないホステスはほとんどいなかった。

円堂は一本つまみだした。カチリ、とライターとの火を点し、委津子がいった。

「吸い終わるまでに決めてよね」

円堂は頷き、煙を吸いこんだ。喉が苦しく、むせた。ニコチンの苦みを感じ、すぐ口から離す。

「マズい」

「やめたあとは、おいしかった記憶しかないけれど、実際吸ったらおいしくない」

「何だよ。思い出といっしょっていいたいのか」

「よくおわかりで」

委津子はにたつと笑った。

「考えるよ。店のこともあるしな」

円堂はいつて、灰皿にひと口吸っただけの煙草を押しつけた。

「ケンジさんに任せられるでしょ、何日間かなら」

ケンジを一度連れてきたことがあった。あの子はいい、と委津子はいった。口が重くて腰が軽い、理想の板前になる、というのだ。



下戸だ、という点も気に入らなしい。酒で舌が鈍らないから料理の味がかわらない。飲みながら作ってしくじった料理人はいっぱいいるというのだ。酔って、上客とそうでない客をあからさまに差別する。そういう店は必ず駄目になる、というのが委津子の持論だった。

「相談してみる」

円堂は答えた。

### 3

「マザー」をでたのは午前二時過ぎだった。銀座の飲み屋街では午後十時から午前一時までのあいだ決められた乗り場以外ではタクシーが拾えないが、この時間だと通りのあらゆるところに空車がいて、客を捜している。

下手な路地で拾うと、表通りにでるまで空車の渋滞に巻きこまれる。中央通りまででることにして、円堂は花椿通りを歩いていた。

「円堂さん！ 円堂さんでしょう！」

不意に声をかけられ、足を止めた。明るいベージュのジャケットを着た白髪頭の男が通りの反対側からこちらを見ている。

赤い派手な眼鏡に見覚えがあった。名前は知らないがクラブ「モンターニュ」のポーターをやっていた男だ。ポーターとは、白タクの手配をしたり、客やホステスの車を自分が「縄張り」としている路上に止めて手数料を稼いでいる連中だ。バブルの頃、銀座の街には無数のポーターが

いた。客の車を預かり、駐禁を切られないように見張るだけで、毎日チップこみで何万という稼ぎを得ていた。

中にはクスリや女の手配をする者もいて、そういう人間はどこかの組に片足をつっこんでいた。バブル崩壊とともにポーターにチップを弾む客も消え、その大半がいなくなつた。

「ああ。久しぶり」

「モンターニユ」は委津子がずっとナンバーワンだった大箱のクラブだ。今も並木通りの八丁目にある。

「ごぶさたしています。お元気そうで」

ポーターは頭を下げた。二見が乗るロールスロイスが止まるとすつとんできて外から扉を開け、「二見会長、こんばんは！」

と大声で挨拶をしたものだ。そして入る店を聞くと、ビルのエレベータのボタンを押し、

「いってらっしゃいませ！」

と叫ぶ。

「大声だすなよ」

といいながらも満更でもない表情で、二見はチップを渡していた。毎晩のことだったので覚えていた。

「何とかね。もう銀座なんてこられる身分じゃないけどな」

「またまた。もつといらして下さいよ。寂しいじゃないですか」

円堂は苦笑し、

「あなた、いくつになつた？」

ポーターに訊ねた。自分と同じくらいの年だろう。

「え、年ですか。恥ずかしいな。六十八です。先日、孫が生まれました」

「俺より六つ上か。それは失礼しました」

「何をおっしゃっているんです。懐かしいですね、あの頃が。二見会長とよくおみえになつていて——」

いいかけ、

「そういえば、先日、会長と会つたつて者がいました」

円堂の顔を見つめた。

「二見さんに？ 嘘だろう」

「あたしと同じポーターだった人間なんです、今は田舎に帰つて蕎麦屋をやつてゐるんです。そいつの店に二見会長がきたつて」

「まさか」

ポーターはあたりを気にするように声をひそめた。

「会社が飛んで、会長も行方不明になつたじゃないですか。正直、生きてはいらっしゃらないだろうなつて。何人もいましたから。毎晩銀座でお会いして首を吊つた方が」

「本当に二見さんだったのか」

「そいつも訊こうと思つたけどやめたそうです。もしそうだとしても認めたくないだろうつて。

あれだけ羽振りのよかつた人ですから」

「その人はひとりできたのか」

ポーターは頷いた。

「おひとりだったそうです。そいつの店はバス停の前であって、盛りを食ったあと、二見さんはきたバスに乗っていったって」

「どこなんだ？」

「福島みなみあいづの南会津です。山の中ですよ」

「南会津」

「会津高原の『高取たかとり』って店です。田堂さん、二見会長とはその後——」

田堂は首をふった。

「いなくなつてからは、それきりだ。亡くなつたと思つていた」

「え、じゃマズいこといっちゃいましたかね」

ポーターは首をすくめた。

「いや、俺は二見さんに恨みはないよ。あつたとしても今さらどうしようもない。二見さん、ていうか、その似た人つてのは、どんな感じだったんだ？」

「そこまではわからないですけど、何なら訊いてみますか——」

携帯をとりだしかけ、舌打ちした。

「あ、もう寝てるな。田舎暮らしなんで」

「会津高原の『高取』さんだね」

「ええ、ですけど——」

「大丈夫、迷惑はかけないよ」

「いや、そんな迷惑なんて……」

ポーターは口ごもった。

これも縁か。円堂は思った。中村が二見の車を見た者がいると知らせてきた日に、昔馴染みのポーターから二見が生きているらしいという噂を聞く。

自分の昔に決着をつける、という委津子の声がよみがえった。

「あの、他人の空似かもしれないんで……」

不安になったのか、ポーターは口ごもった。

「大丈夫だよ。あちこちで喋ったりはしない。でもその蕎麦屋さんに、もしかしたら俺が訪ねていくかもしれないと、明日にでも伝えておいてくれないか」

いって、円堂は財布から出した五千円札を押しつけた。ポーターは手を振った。

「いや、お金をいただきたくて話したわけじゃないんで——」

「わかつてる。でも覚えてもらっていて、俺も嬉しかったんだ」

円堂がいうと、ポーターはようやく受けとった。

「あなたの名前を覚えてくれないか」

「浜田はまだです。蕎麦屋をやっているのは、店名通り、高取って奴で。もしいかれたら、俺の名前をだして下さってかまいませんから」

「わかった。ありがとう」

ポーターと別れ、中央通りで拾ったタクシーに乗りこんだ。

もし二見が生きているのなら、君香も生きていて不思議はない。

だが蕎麦屋にきた客はバスに乗って帰ったと浜田はいつた。あのスパイダーが今も走るなら、なぜ乗ってこなかったのか。

目立ち過ぎるからだ。世界に百台しかない、フェラーリ250GTカリフォルニア・スパイダーは、その名を知らない人間にも、見るからに貴重なクラシックカーだとわかる。そんな車を始終乗り回していれば必ず噂になり、やがて二見に貸しがある人間の耳にも届く。

三十年がたち、バブル時代の債権など極道でも回収をあきらめている。だが売ればとてつもない金額になるクラシックカーを債務者が乗り回しているとすれば話は別だ。

ではなぜスパイダーを女が運転していたのか。

乗らなければエンジンが駄目になるからだ。作られてから六十年がたつ車を、極端に暑い日や寒い日、雨の日に走らせるのは故障の原因となる。壊れた部品の調達は容易ではなく、できるとしてもイタリアのフェラーリ本社とのやりとりになるだろう。

そこで年老いた犬を散歩させるように、日を選んで走らせていたのだろう。

ハンドルを二見ではなく女が握っていたのは、高齢の二見には運転の自信がなかったからではないか。

円堂は息を吐いた。考えが暴走している。

赤のスパイダーが那須を走っていたのは事実だとしても、運転していたのが君香と決まったわけではなく、会津高原の蕎麦屋を訪れたのも二見とは限らない。

二人が生きているかどうかすら定かではないのだ。

だが生きていて、今もいっしょにいるとしたら。

嫉妬が胸を焼いた。三十年間、世間から隠れ、肩を寄せ合って生きてきたとすれば、どれほど睦まじい関係なのだ。結婚すら考えていた自分より、二十五以上年上の二見と仲よく暮らしてきたというのか。

思わずため息がでた。

何もかも失っても尚、自分より二見のほうが君香には魅力があったということだ。

男として人間として、二見にはとうてい太刀打ちできないとわかっていた。

委津子がいうように、円堂は二見を尊敬していた。同じことはできないし、同じようになりたいたとも思わなかったが、円堂が生きてきた灰色の世界で、初めて筋が通っていると感じた人だった。

裏の世界の人間はすぐに「筋を通す」とか「人として」という言葉を口にするが、その大半は自分にとって都合のいい場合だ。

他人には筋を通せとっておいて、自分はその筋を平気で無視する。筋などという言葉は因縁をつけるための材料でしかない。

まっとうに生きている人間は筋を通すのがあたり前なのだ。契約を守らなければ取引相手を失くし、やがては訴えられる。

契約などない世界だからこそ、筋だの人だのという理屈が幅をきかせる。契約がないのは、筋など通しては金儲けができないからだ。

まっとうな金儲けをする能力がないからこそ、裏の世界で仕事をする。学歴がなくタネ銭も

たず、信用される所屬先のない人間が大金を得たかったら、違法な手段に訴える他ない。法を犯せば、まともに勤めたのでは決して得られない金を短期間で稼ぐことができる。

だがひきかえに、刑務所にぶちこまれたり、別の奴にハメられたり、場合によっては命を落とす。

二見はそれをよくわかっていた。地上げのために、ここまではやってもこれ以上はしない、というルールを決め守っていた。二見興産が危なくなり、ケツに火がついていても、力づくで金をむしるような商売はしなかった。

それを甘いと嗤う人間もいたが、円堂は立派だと思っていた。

君香のことさえなければ、生涯、尊敬しつづけたろう。

君香も金ではなく、人間性で二見を選んだのだ。

いや、スパイダーを残していたように、二見には隠した財産があり、君香はそれを選んだのではないか。

そう思いたい。スパイダーを残しても尚、三十年間隠遁生活を送れるほどの財産があった。だから二見についていったのだ。

中目黒のマンションに帰ると、円堂は明りもつけないまま、2LDKのリビングでアグラをかいた。

自分のほうが若く、愛情においても負けていたとは思わない。それでも君香が二見を選んだのは、二見に隠し財産があったからだ。

そう信じなければ、自分が惨めだ。



自宅で酒を飲むことは滅多にない。だがひと通りはおいてある。「いろいろ」の周年のときに客からもらったスコッチがあった。

アイラモルトで香りがきつく、一杯飲んだきりでやめていたボトルを、円堂は流しの下からとり出した。

キャップを外し、ラップを呑みする。

こんな自問自答を何度くり返したろう。無意味だ。理由が何であれ、去っていった女は去っていった女で、まして三十年もたった今、どうすることもできない。

忘れようと決め、それに成功した、と思っていた。

中村の電話が、そうでなかったことを気づかせた。ヨード臭の強い酒が喉を焼き、胃袋を熱くする。自分を責め苛む気分がぴたりだ。このウイスキーを初めてうまい、と感じた。

翌日の午後、仕入れを終え、二日酔いが少しマシになるのを待って、円堂は中村に電話をかけた。

「はい」

執筆中だったのか、ひどく無愛想な声で中村は応えた。

「マズいならかけ直す」

「別にマズかねえよ。このクソ頭をカチ割りたいだけで。いつものことだ。何だよ」

「福島の会津高原では、そこから遠いか」

「会津高原？ それほど遠くない。栃木との県境の近くだ。なんでだ」

「二見を見たって奴がいる」

中村は黙った。円堂は言葉をつづけた。

「そいつは昔、銀座でポーターをやつてて、今はひっこんで蕎麦屋をやつてるらしい。その蕎麦屋に、二見がひとりで現われ、蕎麦を食つて帰つてつたというんだ」

「スパイダーに乗つてたつてか」

「いや、バスで帰つていった」

「バスなんて何本も走っているようなところじゃないぞ」

「だろうな」

しばらくどちらも無言だった。やがて中村がいった。

「くるのか」

「その蕎麦屋にはいつてみようかと思っている」

「だったら東北新幹線で、那須塩原しおほらじゃなく新白河しんしろかわまできてくれ。うちからはそのほうが近い。

迎えに行く」

「仕事は大丈夫なのか」

「お前がこられるとすりゃ、土曜か日曜だろ。それまでにはこの原稿のメドがついてる」

「車でいこうと思つてたんだが」

「やめておけ。帰りが渋滞する。車は俺のがある」

「わかった。土曜日に行く。泊めてもらうかもしれん」

「それはまったく問題ない」

「土曜日、乗る列車が決まったら連絡する」

「それまでにやっておくこと、あるか？」

中村は急にきびきびとした口調になった。

まるであの頃のような。中村が地主や借地人の情報を集め、円堂が立ち退き交渉に動く。

「スタンドだ」

円堂は答えた。

「スタンド？ ガソリンスタンドか」

「ああ。スパイダーに給油する客がいなかったか、時間があれば訊きこんでくれ」

「できる範囲でやっておく」

「よろしく頼む」

「円堂——」

「何だ？」

「いや、何でもない。土曜日、連絡をくれ」

「ああ」

電話は切れた。中村のいいかけたことは想像がついた。君香だ。君香を捜す気なのか、と訊きたかったにちがいない。

君香も二見も捜す。見つけて、金をとろうなどとは思っていない。恨みごとをいう気もない。元気でいるならそれでいい。確かめるだけでいいのだ。自分にいい聞かせた。

中村にいつても決して信じないだろう。だが、会えば、過去に決着がつく。それは確かだ。